

山口喜一郎（1939）『日本語話方入門』をめぐって

平高史也（慶應義塾大学）

1) 山口喜一郎（1939）『日本語話方入門』

斎藤修一（1987、88、89、91）が一部を紹介

『日本語大事典』（朝倉書店、2014）：「満州では、満鉄職員のための日本語教科書『話方入門』を編集。」（下巻 p.2035）花田修一執筆

2) 北京大学本

上巻：昭和14年12月5日印刷、昭和16年12月1日4版発行 定価35銭

下巻：昭和14年12月5日印刷、昭和16年12月5日4版発行 定価45銭

著作人：山口喜一郎 大連市紅葉町6番地ノ4

印刷所：昭和印刷所、発行所：昭和印刷所出版部、いずれも大連市加賀町6番地

印刷人、発行人：足立孝

→初版の発行はいつ？どちらにしても新民学院在職中（1938.1.～1943.8.）だが、発行所是北京（の新民印書館）ではなく、大連

3) 構成

目録（＝目次）

語音練習表：五十音表、濁音表、母音（ボオン）練習、子音（シオン）練習（1～3）

「訛音矯正のために、特に特に種々な語音の結合表を作ってそれによって練習さすことは便利有益である。…（1）調音部位の離れたものを組み合せたもの。…例 アイタイ…（2）調音部位の近きものを組み合せたもの。…（3）誤り易いものを組み合せたもの。…」山口（1933: 409-410）

*O. & N. Mizutani（1977）An Introduction to Modern Japanese. Japan Times
新語難音表

本文：上巻：33課（89p.）、下巻42課（133p.）

附録：上巻（15p.）、下巻（16p.）

新語表（上巻341語、下巻396語。ただし、複合語等も含む）

*みんなの日本語初級I：約1,060 Nihongo no Hanasikata 約1,100

新語形表（後述）

4) 特徴

(1) 本文は上下2段組み、新出語に圏点、カタカナ表記、分ち書き

「上段には新出語と新出文型を示すとともに、下段には直接法による授業の展開が示してある。これはまさに山口市直接法的具体例である。」(斎藤 1987: 2)

カタカナ表記: 原則として発音通り。長音符号は使わない。

(2) 対象

おそらく青年(現在の高校生くらい)。朝鮮(1911~25)、関東州(1925~30)、満州(1935~37)で相対した学習者(師範学校/学堂)、奉天铁路学院)の学習者をイメージ?実際にいつ、どこで、だれに対して使われたかは不明。

○「…青年で教育あるものには、私が年来やって来た数の言葉を出発点として、…」(山口 1941: 107~108)

○ワタクシ ワ チョウキンキュウ デス。 コンネン ジュウシチサイ デス。 サクネン ガッコウ オ ソツギョウ シマシタ。(下 31) (同じ課の後段で友人を「イマ コノヒト ワ ギンコウ ニ デテ イマス。」と紹介。

○コンネン ワ ミンコク ニジュウハチネン デス。 コウトク ワ マンシュウコク ノ ネンゴウ デス。(下 16) と、中華民国、満州国双方に言及。

○「昭和9年に4ヶ月ほど満州海城の日本語学校で、…試験的に同校の1年生を新入学の4月から日本語を教えたことがある。生徒は167歳のもので、1週間の教習時数が15時間、入学直後から一切の読本や日本語教習用書を使わずに**特別の教材**を作り、…私が、今日、新民学院や中央铁路学院の如き教育程度の高い青年学生に向って行、速成急進の日本語の教習に要する、教材と教法について、経験上の自信を得たのは此の試験的な教習の賜物である。」(山口 1941: 154)

→斎藤(1987)も記しているように、この「特別の教材」のような日々の実践が下敷きになって作られたか。その意味では、今でも行われている、事前の試用を繰り返したのちに教科書として出版するケースに近い。

○新民学院で試用/使用されたのか?

「日本語ハ現代ノ談話文章ヲ教授シ其聴解読解ノカヲ養ヒ日本語ノ特質ヲ知ラシム」(『中華民国国立新民学院便覧』第2章教課第9條 24、p.14)

5) 新語形表をめぐって: 「文型」か? 「語形」か?

(1) 文型研究と文型集の刊行: 1940年代

『コトバ』第3巻第2号 文型特集(1941)、青年文化協会(1942)、国際文化振興会(1944)

(2) 「文型」使用は1921頃から?

「筆者がこれ(=文型という語)を使用したのは大正10年ごろだと思う。」

(大出 1941:22)

(3) 山口喜一郎、鹿子生儀三郎、大出正篤

「山口氏の講習（＝大正3年春）が終わると同時に、鹿子生儀三郎氏を満州に招来した…鹿子生氏は当時（＝朝鮮時代）山口主事の下で一訓導として、共に研究を重ねた人で…」（満鉄初等教育会第二部 1933: 2, 67）

「氏は明治42（1909）年京城の官立普通学校の訓導に任じ、同校に於て山口氏等と共に日本語教授を研究し大正3（1914）年満鉄に入って…」（同上）

「鹿子生氏と共に沿線日本語教授に貢献された人に大出正篤氏がある。氏は京城高等普通学校の教官として日本語教授の研究に努力…大正8年大連の教育研究所の講師として聘せられ…」（満鉄初等教育会第二部 1933: 3）

○山口： 1911（明治44）5月～1925（大正14）3月 朝鮮

1914（大正3）春：京城から遼陽に招かれ、講習会開催

1925（大正14）～30（昭和5）関東州旅順師範学堂嘱託

○大出： 1913（大正2）～1919（大正8）漢城師範学校、京城医学専門学校

1919（大正8）～26大連満鉄教育研究所講師

○鹿子生：1909（明治42）京城の官立普通学校の訓導

1914（大正3）～1924（大正13） 満鉄

→鹿子生と大出は同じ時期（1919～24）に満州で日本語教育に従事。

(4) 鹿子生：「語形」

「この間の語形の大体を次に挙げる。」（満鉄初等教育会第二部 1933: 180）

(5) 山口の鹿子生評価

「…偶昭和5年の初夏、京城帝国大学教授高木市之助氏が満洲視察に来られたのにお目にかかった時、外国語としての我が国語の教授法に就いては此の小冊子がよいと云って、元満鉄会社員で直接法の指導者であった鹿子生儀三郎氏が会社に提出して刊行頒布された日本語教授法をあげられたのに驚いたのであります。…そんなものが大家の賞揚に値うかと驚き…」（山口 1933: 2）

(6) 山口：「原形」

「原形練習とは、教授した材料を確実に習得させ、記憶を固定させることを目的とするもので、教授した材料を原形のままで原方法を踏襲して反復させるのを本式とする。」（山口 1933: 308）

(7) 満州国文教部（1935）に「文型」が見られるが、『初級小学校日本語教科書』は山口が「編纂の指導に当たった」（関 1996: 750）のか？

(8) 「語法」「語型」は見られるが、「文型」は？

「…言葉の社会性と具体性を捨てて無記中性な抽象的なものとし、言葉を資料的に記憶し、それを用例的に練習させて、語法による文型をつかませておけば、鋳型に鉄を流しこんでいろいろな鋳物が出来るように、談話が出来ると考えて、談話に於ける話手と聴手の意志を無視するのは、…」（山口 1941: 93）

6) 本文

(1) 内容・語彙

上巻

1～14 課：教室（文房具、衣類、授業） 15～16 課：手紙

17～23 課：自宅（帰宅、部屋、家具、位置、来客）

24～33 課：数量（数字、計算、単位、数え方）

下巻

1～7 課：金銭、値段、買物

8～11 課：時計、時間、一日、朝昼夜

12～13 課：一日（仕事、食事）

14～16 課：曜日、日付、月名、年号

17～19 課：四季

20～22 課：天気、方角、朝日・夕陽

23～25 課：田舎の様子

26～27 課：家族

28～29 課：身体部位

30～33 課：掃除、友人、家の位置、挨拶

34～35 課：計量

36～37 課：町の建物

39～42 課：駅、汽車

○基本は空間（場面、話題）、時間の拡大→言語生活（領域）に対応

○身の回りの物、日常生活で用いる語が中心

○数量詞や助数詞を扱う課が多い。

○今ではあまり初級では扱わないと思われる語彙、話題

ナダカイ （下 26、37）

ミナミムキ ノ イエ ヒ ガ ヨク アタリマス（下 22）。

タッタ フタツ ノ メ デス。コレ デ ナン デモ ヨク ミマス。…

タッタ ヒトツ ノ クチ デス。コレ デ ナン デモ ヨク タベマス。マタ

ドンナ ハナシ デモ シマス。（下 28）

○認定に疑問がある新出語やダブリ

デアリマセン（上 1）、ヒトノナマエ（上 10）、ヨンデミマショウ（上 24）

ハナセマス（下 42）、オロシタリ、ツンダリ（下 42）

デキマシタ（上 14&16）、トリマス（上 17&17）

(2) 文型の配列

上巻

1～6 課：N は N です。

7～9 課：「あります」*ただし、「います」は新出語表には 14、22

10～14 課：10 課「N といいます。」で一応 V 初出。正式には 11 課から（～ます、～ました、～ましょう）

14～17 課：V（てごらん、ている、～、てみる、てください、てから、～て、～）

19～20 課：A イ、A ナ（+N）

20～21 課：V（てある）

22 課：V（あう）

22、24 課：V (ている)

24 課：V (なさい (下 24、28)、ませんから (理由))、可能形

25 課：A イ (普通体)

24～33 課：数量詞、助数詞

26 課：連体修飾 (「タス／ヒクケイサン」) 27 課：比較

29 課：V (ことができる) (下 15) 31 課：「もらう」「やる」

33 課：V (もの)

下巻

1 課：V た N、A イの

2 課：N というのです、V (ましょう) (推測＋同意請求、15)

3～4 課：A イでしょう、そんなに A クありません。A イのです(25)

7～8 課：V (ますまえに)。V (ことがある)。V ますから。A イようです。

11 課：V (ことがある)。A クなる。N が V ますと、どうなりますか。

20 課：A イ／V (ます) と、V (ます)。A になります。たいへん V (ています)。

24 課：A イけれど、N は A クありません。V (ている)

25 課：N を N が V ます。(場所／経路)

26 課：N の N には N が N います。N が V (ましょう)。33 課：A クしています。

34 課：A イか、A イか、V (ます)。A イ、A イを どんなに V (ますか)。

35 課：A イ／A ナのを V (てもかまいません) か。A イから、V (ました／
ましょう)。V (てもらう)。N をもらい／ひきましょう。

36 課：V (たり)、V (たり) するのです。(下 37、42)

37 課：N がたくさん V て、V (てもらいます)。A イ N ですから。

A イ N が V (ます) から、A イのです。N から V (ませんか)。

40 課：N を V て、N を V ました。V (るといけません) から、A ク N へ

V (ました)。A イことはありません。V ると、A イことはありません。

41 課：V 可能動詞なくなる。(理由) V (れます) か、V (ことができましょう)。

42 課：N ができる／V (ようになり) ました。

○新語形がないとされる課：上 6、23、28、32、下 6、9、10、14、16～19、21～
23、27、28、30～32、38、39、41

○綿密な文型の積み上げ：

連体修飾： タス／ヒクケイサン (実は V ル) (上 26)

*オイシイ モノ (上 32)

コンナニ カゾエル モノ (上 33)

チガッタ サツ／イイカタ (下 1)

ムカッテイル ホウ (下 21)

ハナ ノ シタ ニ アル モノ (下 28)

アネ ガ オヨメ ニ イッタ ウチ (下 38)

キップ ヤ ニュウジョウケン オ ウルトコロ (下 39)

○丁寧形が頻出

ワカリマシタ デショウ (上 15) マダ ナライマセン カラ (上 24)

マチガッテ イマセン デス カ (上 25) ノリマス マエ ニ (下 7)

ヒト ガ ヒ オ トモシマス ト (下 11) アカルク ナリマス ト (下 12)

ツクリマス ノ デス (下 25)

ナンジ デス カ、ワカリマセン。(下 9 複文も)

○今の教科書ではあまり扱わないと思われる V マショウ (推測+同意請求)

*国際文化振興会 (1944) は普通体で収録。

ヒ ガ ヨク アタリマショウ ネ。フユ ワ ヒ ガ ヘヤ ニ サシマショウ。
(下 22)

ソレ デ ロクニン ニ ナリマショウ。(下 26)

○問答形式や疑問文が新語形表に頻出

コレ ワ ツクエ デス カ。ツクエ デス。ソウ デス。(上 1)

コレ デ ナニ オ シマス カ。コクバン ニ ジ オ カキマス。(上 13)

ガイトウ オ キテ、ボウシ オ カブッテ、ソレカラ ドウ シマス カ。

ソト エ イキマス。(上 17)

アナタ ワ エンピツ オ カゾエル コト ガ デキマス カ。

ミナ カゾエル コト ガ デキマス。(上 29)

バス ニ ノリマス マエ ニ ナニ オ カイマシタ カ。(下 7)

ガッコウ ト ヤクショ ト ドチラ ノ ジカン ガ ナガイ デス カ。

(下 13)

7) 考察

(1) 課の配列の根底にある考え方

身近な領域から周辺へと、つまり、直観的に理解、表出できる領域から拡大。イマ・ココ・ワタシを起点 (基点・原点) とした言語観が素材の配列にも反映。

「六、教材の選択排列の順序を決定する、事実内容についての標準はどうか。

…日本語を外国語として教習さず教材は大凡次の標準によるがいい。

(1) 直観的な事物を先にし、漸次無形抽象的な事柄を加えること。

(2) 初期には客観的な事物と (ママ) 主とし、それを基礎として主観的な人格的な事象を加えること。

(3) 最後には人格的な人間的な事象を主とすること。

直観し得られる事物といえ、学習者の身辺にあって、空間的な大した拡がりを持たぬもので、時間的に現在しているものということになり、学習者が終始経験して知りぬいているものということになる。それが漸次拡がり延びて、空間では近隣・郷

土・自国・他国のことにまでひろがり、時間では一日、一週、一月、一年、数年と延びて、遂には年百年何千年の歴史のことにもなる。従って、最初は事実の内容に言葉を結びつけることが主となり、後になっては、言葉で未知のことを知らせて、言葉の機能を経験させることが専らとなるので、この直観的な事実による教材が、最も日本語の基礎を作るもので、学習者の教育や年齢の如何にかかわらず、必ず通らさなくてはならぬ段階であるが、ここの教材の選択と排列がなかなかむづかしいのである。青年で教育あるものには、私が年来やって来た数の言葉を出発点として、漸次それを貨幣・時間・売買などと生活に関する事柄に展開させてゆく、選択と排列が割合に生活に直接して適切であり、それでよく統一を保ち、いろいろの語彙語型を教えることが出来るのである。」（山口 1941: 107~108）

(2) 積み上げ式←反復？

「我々の生活は、同一事の反復の中に時たま新しいことが新生して、それが反復される同一事に新意味を与えて進展するのである。教材を学習者の生活に適切なものから採るとすれば、生活のこの姿が教材の記述叙述の上に反映することは当然である。自然、談話にも同語及び同型語の反復重出することも、当然なことであるに拘わらず、多くの既刊教習用書は、この同語同型語の重出を嫌って、新語新語型の提出に努めている。」（山口 1941: 103~104）

(3) 素材（や文型）の配列の根拠にあるのは、言語学（国語学）的な視点というよりは、言語活動の視点、いいかえれば、教授法（直接法）的な視点

「… 外国語の教習を言語活動にし、言葉を具体的に社会的に体得させる全一性をもつ教材とは、如何な条件を備えなくてはならないか…

- 一、学習者の学習目的に照し、その生活に適切な事柄を内容とし、その事物的意味を主題としたものであること。…
- 二、各課に於ける内容事項の選択と排列は、主題的意味が事物の上に展開する状況に依り、その事項の軽重と精粗を均衡を失わない様にする。…
- 三、各課各項目の中の各事項は実際の言語生活の状況に合する様にする。…
- 四、一課内の各項も全教材の各課も、その内容事項の間に連絡があり、互に関連して教材全体が何等かの主題的意味に統一されて、全一性をもつよう。…
- 五、各課の記述叙述は、主題的意味が事物の上に展開する状況に従い、みだりに新事項のみを多くしない様にする。…」（山口 1941: 96~103）

(4) 山口のキャリアの集大成としての『日本語話方入門』？

直接法の見方を実地に活かした教材として、また、台湾時代からの教授法（グアン、問答）の反映などを考えると、敗戦までの日本語教育者としては集大成と見ることができる。他方、山口は対話（問答）と言語活動領域を鍵概念とした話し方教育観をもって、戦後も話しことば教育に従事していく。その点を考えると、『日本語話方入門』はさらに戦後の話しことば教育研究へとつながっていくものとも考えられる。

*北京大学外国語学院図書館で『日本語話方入門』を閲覧、複写した際にお力添えをいただきました高木丈也氏（慶應義塾大学総合政策学部専任講師）に感謝申し上げます。

参考文献

- 大出正篤（1941）「日本語の初歩教授から見た文型の考察」『コトバ』3巻6号 1941年6月（冬至書房復刻版）
- 河路由佳（1996）「戦前・戦中の在日留学生に対する直接法による予備教育用日本語教科書 国際学友会編『日本語教科書 基礎編・巻一～五』—その編纂・内容・使われ方—」『文教大学文学部紀要』10-1号 121-156
- 国語文化研究所（1941）『コトバ』第3巻第2号（ゆまに書房復刻版）
- 国際文化振興会（1944）『日本語表現文典』
- 斎藤修一（1987）「〔資料〕山口喜一郎著『日本語話方入門』（北京大学本）1」『日本語と日本語教育』第16号 1-13 慶應義塾大学国際センター
- 斎藤修一（1988）「〔資料〕山口喜一郎著『日本語話方入門』（北京大学本）2」『日本語と日本語教育』第17号 1-13 慶應義塾大学国際センター
- 斎藤修一（1989）「〔資料〕山口喜一郎著『日本語話方入門』（北京大学本）1」『日本語と日本語教育』第18号 1-12 慶應義塾大学国際センター
- 斎藤修一（1991）「〔資料〕山口喜一郎著『日本語話方入門』（北京大学本）1」『日本語と日本語教育』第20号 49-61 慶應義塾大学国際センター
- 佐藤武義・前田富祺 編集代表（2014）『日本語大事典』朝倉書店
- 新内康子研究代表者（2012）「日本語教育用文法用語の通時的かつ共時的研究—その出自から使用の実態まで—」平成21～23年度 科学研究費補助金基盤研究（C）（課題番号21520558）研究成果報告書
- 青年文化協会（1942）『日本語練習用日本語基本文型』国語文化研究所（冬至書房復刻版）
- 関正昭（1996）「『文型』再考—戦時中の文型研究をめぐって—」平山輝男博士米寿記念会編『日本語研究諸領域の視点』上巻 745-758 明治書院
- 中華民国国立新民学院（1939）『中華民国国立新民学院便覧』
- 平高史也（2000）「鹿子生儀三郎についての覚え書き」木村宗男先生米寿記念論集刊行委員会編『日本語教育史論考—木村宗男先生米寿記念論集—』97-107 凡人社
- 満鉄初等教育会第二部（1933）『満鉄沿線に於ける日本語教授法の変遷』南満洲鉄道株式会社地方部学務課
- 山口喜一郎（1933）『外国語としての我が国語教授法』（冬至書房復刻版）
- 山口喜一郎（1941）『日本語教授法概説』新民印書館（冬至書房復刻版）

資料：山口喜一郎『日本語話方入門』各課のタイトル

上巻

- | | | |
|---------------------|-------------|---------------------|
| 1 ツクエ | 2 カミ。フデ。 | 3 ツクエ ト イス |
| 4 ボウシ。テブクロ。 | 5 コレモ。ソレモ。 | 6 センセイ。 ト セイト。 |
| 7 キョウシツ。 | 8 セイト ノ モノ。 | 9 ダレ ノ モノ。 |
| 10 ナマエ。 | 11 ジブン ノ セキ | 12 ニッポンゴ ノ ケイコ |
| 13 ジ オ カキマス。 | 14 ホン | 15 テガミ。 |
| 16 テガミ オ カキマス。 | | 17 ボウシ オ カブツテ。 |
| 18 イエ | 19 ヘヤ | 20 ヘヤ ノ シナモノ |
| 21 シナモノ ノ オキカタ | | 22 ヒト ガ イエ ニ キマシタ |
| 23 ツクエ ニ ムカッテ。 | | 24 カズ ノ コトバ。(1) |
| 25 カズ ノ コトバ。(2) | | 26 カズ ノ ケイサン。(1) |
| 27 カズ ノ ケイサン。(2) | | 28 イロイロ ノ カゾエカタ。(1) |
| 29 イロイロ ノ カゾエカタ。(2) | | 30 ヒト ノ カズ。 |
| 31 イロイロ ノ ケイサン。 | | 32 クダモノ。 |
| 33 ヒトツ。フタツ。 | | |

下巻

- | | | |
|--------------------|-----------------|-------------------|
| 1 オカネ | 2 オカネ (2) | 3 シナモノ ノ ネダン (1) |
| 4 シナモノ ノ ネダン (2) | | 5 カイモノ。 |
| 6 ヒヤク ト セン。 | 7 ツリセン。 | 8 トケイ |
| 9 ジカン。 | 10 イチニチ。 | 11 ヒル ト ヨル。 |
| 12 イチニチ ノ シゴト。 | 13 ハジメ ト | オワリ。 |
| 14 ニチヨウ カラ ドヨウ マデ。 | | 15 イチジツ フツカ。 |
| 16 ツキノナ ト ネンゴウ。 | | 17 ヨッツ ノ ジコウ。 |
| 18 ハル ト ナツ。 | 19 アキ ト フユ。 | 20 テンキ |
| 21 ホウガク。 | 22 アサヒ ト ユウヒ。 | 23 チイサイ ムラ。 |
| 24 ヨイ ケシキ。 | 25 イナカ ノ ミチ。 | 26 イエ ノ ヒトタチ。 |
| 27 ネンレイ | 28 メ ヤ ミミ ナド。 | 29 リョウテ リョウアシ。 |
| 30 ソウジ。 | 31 ワタクシ ト トモダチ。 | |
| 32 トナリ ト ムカイ。 | | 33 アイサツ。 |
| 34 ハカリ。モノサシ。マス。 | | 35 ハカッテ ミマショウ。 |
| 36 マチ ノ タテモノ (1)。 | | 37 マチ ノ タテモノ (2)。 |
| 38 シンルイ。 | 39 テイシャバ。 | 40 キシャ ニ ノッテ (1)。 |
| 41 キシャ ニ ノッテ (2)。 | | 42 キシャ ニ ノッテ (3)。 |